

「心」と「身」と「世界」の関係の再構築に向けて ―天台教学の視点より―

大正大学 塩入法道

《レジュメ》

自己と世界あるいは他者との関係について、仏教思想とくに天台教学の立場から、現代にも通ずる見解を提示しようと試みるのが本論の趣旨である。思うに仏教そのものに唯心論的傾向が強く、例えば『俱舍論』に説く一切法を分類した五位七十五法では色法は 11 を数えるが、そのうち色境～触境のみが外界と考えられる。しかもあくまでも眼根～身根の対境としての世界である。一切法といえども自己の心と身体から全く独立した世界は想定されていないように見える。

それは天台教学においても同様であるが、天台では南岳慧思の思想にもとづいて、一切法を衆生法・仏法・心法の三法に分類する（『法華玄義』大正 33・693a）。これらのうち自己と世界（他者）の関係を考えるにあたっては、とくに衆生法の考察が重要と思われる。

衆生とはいかなるものであろうか。一般的には、「生きとし生けるもの、生命あるもの」という程の意味で使われることが多いが、生物全般なのか、人間なのか、人間社会なのだろうか。大乘菩薩の重要な徳目として、「下化衆生」「済度衆生」等が主張されている。例えば最澄の言う「忘己利他」は、自分のことはさておいて他人の利益や幸福を求めるという意味にとられがちであるが、利他とは単なる自己犠牲や奉仕のことではあるまい。自他の分別を越えて仏知見に入ることであろう。とすると自己と衆生とは客観的存在物として対立的に考えるわけにはいかない。衆生そのものが何を意味しどのような属性を有するものかという問題とともに、自己との関係においても単純な解釈では把握し切れないものがある。

「衆生とは、すなわちこれ五陰入界等の法なり。この実法を攬りてもって身となし、衆生と（名づく）なり」（『維摩文疏』卅続蔵、通巻 28・0268）。とあるように天台教学では、陰入界が衆生であるとされる。なお智顛の撰述の中では、五陰を単独で示す場合もあるが、陰入、陰入界、陰界入という語で述べられることが多い。入とは十二入、界とは十八界であるのでこれらは五陰とは別の六根の系列に属するものであるが、同一の範疇にあるものとして論じられているといえる。

衆生が陰入界であるという主張に見られるように、天台の教学においては、衆生とは客観的存在としての「生けとし生けるもの」ではない。五陰あるいは六根として主観的に捉えられる一切世界である。さらにそこには三諦三観の思想や十界十如の実相の思想が縦横に展開しているのである。

「心」と「身」と「世界」の関係を、陰入界というあり方で捉えた天台の衆生観のよって見るならば、現代的認識に対して「古くて新しい」提言ができるかもしれない。一切法は陰入界を通して我々の心が把握した限りでの一切である。それを観心という局面で追求するのが心法であり、自己の向上を目指すとともにそれを保証するのが仏法である。ややもすれば単なる唯心論に堕ちってしまう危険性もあろうが、広く言うならば「私」と切り離された「世界」はあり得ないということが理解できると思う。

〈キーワード：天台教学、心と身、衆生〉